

平成 30 年度小牧市総合教育会議 議事要旨

日 時	平成 30 年 11 月 1 日 (木) 10 時 00 分～11 時 45 分
場 所	小牧市役所本庁舎 6 階 601 会議室
出席者	<p>【委員】</p> <p>山下 史守朗 小牧市長 中川 宣芳 小牧市教育委員会 教育長 山田 周司 小牧市教育委員会 委員 (教育長職務代理者) 斎藤 由美 小牧市教育委員会 委員 伊藤 敬一 小牧市教育委員会 委員 伊藤 和子 小牧市教育委員会 委員</p> <p>【説明員】</p> <p>小塚 智也 市長公室長 鵜飼 達市 市長公室次長 伊藤 武志 教育部長 高木 大作 教育部次長 (学校教育担当) 松浦 智明 教育部次長 (社会教育担当) 小川 正夫 教育委員会事務局 教育総務課長 林 孝政 教育委員会事務局 教育総務課 庶務係長 加藤 和昭 教育委員会事務局 学校教育課長 野田 幹広 教育委員会事務局 学校教育課主幹 堀田 正二 教育委員会事務局 学校教育課長補佐</p> <p>【事務局】</p> <p>駒瀬 勝利 市長公室 秘書政策課長 安藤 誠 市長公室 秘書政策課 市政戦略係長 倉田 和典 市長公室 秘書政策課 市政戦略係</p>
傍聴者	3名
配付資料	資料1 構成員名簿／座席表 資料2 平成 30 年度小牧市教育委員会基本方針 資料3 (仮称) 小牧市学校教育情報化推進計画～素案～

内容

<p>1. 市長あいさつ 山下市長よりあいさつ</p> <p>2. 教育長あいさつ 中川教育長よりあいさつ</p> <p>3. 議題 (1) 教育の現状について 資料 2 に基づき高木教育部次長より説明。</p> <p>伊藤敬一委員) 基本目標 1 のコミュニティ・スクール導入は、今はどのように進んでいるか。</p>

高木教育部次長)

コミュニティ・スクールについて、学校運営協議会を全小中学校で立ち上げて、学期毎に1回開催している。立ち上がったばかりのため、それぞれの学校で地域との連携がどのようにできるのかというところが見えてこないかもしれないが、これまでの活動事業を踏まえながら、地域と連携した学校運営について、現在協議がなされている。

伊藤敬一委員)

コミュニティ・スクールに参加されている人の話を聞いたが、今までとどう違うのかとか、なぜこれをやらないといけないのかなど理解が進んでいない。その認識を深めていかないと、そこに参加されている人自身が何だろうという状況でやっているのだから、各学校の状況に応じて、少しアドバイスをしていくと上手くいくと思う。

齋藤委員)

基本目標1「学び合う学び」を支える教員研修の実施ということで、研修講座の充実というのはどういう形で実施されているのか教えてほしい。

野田学校教育課主幹)

「学び合う学び」の教員研修としては、今年度は教育講演会という形で、学習院大学の佐藤学先生を招き、学びの共同体・学びの仕方について、全教員対象に実施しており、それに加え、夏季の教職員研修で講座を設けて、児童理解・生徒理解に努める研修を実施している。それから授業づくりということで、今年度は図工・音楽・体育の実技について、仲間から学ぶということで授業をつくるという講座を設けたほか、道徳についても、一宮市立浅井中学校の山田校長先生を招き、一般教員対象の研修講座を、教務・校務合同で実施している。また学校毎でも「学び合う学び」の研修を実施している。

伊藤和子委員)

教育委員会の視察で文化財団を訪ねた際、施設が古く老朽化して手狭だという話を聞いた。その点について事務局はどのように考えているのか。

松浦教育部次長)

財団が担っている事務局の部屋について、人数が多くなり手狭だということは聞いている。今後、環境改善に向けて検討していきたい。また、施設全体の老朽化につきましては、逐次修繕等を行い、環境改善を図っていきたい。

齋藤委員)

ぜひお願いしたい。実際見学して、大変な状況であった。

山下市長)

施設の老朽化は、多くの施設で見られるところであるので順次検討していかなければならないが、文化財団については昨年春立ち上げて、ソフト・ハード一体で運用し、長期的なビジョンを進めていこうというところで、組織も変わり手狭なところがあるので、今内部で検討していると聞いている。現在調整しているので、今後対応していく。

中川教育長)

文化財団について、質的な事業の展開の部分は、明らかに財団設立後成果が出てきている。この部分をさらに進めていくために、財団職員が有効に活躍できるような施策について、市長と協議しながら進めていきたい。

山下市長)

昨年は教育委員会から移管した部分をまずは受けて、同じように展開するという部分に留まったところはあるが、徐々にこれまでの事業を見直し、新たな事業展開を含めて、十分検討をしながら進めようとしている。また、生涯学習の分野も文化財団の方に多くを引き受けてもらい、文化振興と生涯学習を合わせてやっていくということになっているし、専門的な人材を独自に確保して、市民の文化団体等も入り、みんなで協議して進めている。教育長の言うとおり、パワーアップしながら進んできていると思っているので、今後の展開を期待している。ぜひ委員の皆様方

にもご意見等をいただいて、みんなで知恵を出し合っていきたいと思う。

齋藤委員)

基本目標2の「児童生徒の体験活動の充実」というところで、こども議会が開催されたが、終わった後のこどもたちの反応とか今後、この議会をどのように進めていくのかについてお聞きしたい。

堀田学校教育課長補佐)

こども議会が終わった段階でアンケートを実施したところ、会議の回数は、部活動や勉強で忙しい中だったが、土曜日に3回来てもらい、大体これくらいの回数なら可能だという回答を多くもらった。また感想としては、特別な環境で普段ない緊張感の中で経験できたことは良かったという意見を多くもらった。また、これまで市制50周年、60周年の周年事業として開催し、今回の開催については、次のまちづくり推進計画に意見を反映するタイミングとしていいのではないかとということで、開催したところであり、今後どういう形でというのは今後の検討になると思う。

山下市長)

市制60周年の折、平成27年にこども議会を開催し、かなり良かったという思いがあり、市の最上位計画の策定にあたってこどもたちの意見を聞きながら進めていきたいということで、3年ぶりに開催した。この機会を通じて、関心を持ってもらうことも大事だと思っている。今年度から小中学生向けの広報紙も発行することになりこの秋に発行したが、いろんな面で関心を持ってもらいつつ、またこどもたちの意見を聞きながらまちづくりを進めていけるといいと思っている。

中川教育長)

こどもたちの柔軟な発想というのは新しいまちづくりの中で活かせるアイデアがいろいろ散りばめられていると感じた。また、こども議会後の各学校のホームページなど見て、こども議員の生徒たちにとっては貴重な機会だったなというのと、各学校で他の生徒に報告会などで還元しているところは、市政に対しての興味関心が深まる貴重な機会になったと感じている。しかし今後についてどんな形でやっていくかについては、また議論が必要になってくる。

山下市長)

大人の意見を聞く機会が多いが、こどもたちの意見を反映させる機会を多く持つことは非常に大事なことだと思う。例えば、図書館のワークショップなど利用者視点を含めこどもたちに参加してもらったりだとか、いろんな機会を用意していきたい。

伊藤和子委員)

母親の立場からすると、こどもにとっても市政に興味を持つ最初の一步だと思うし、市民としての自覚も出ると思う。社会性を身に付けるためにも、一部の人ではあるが参加したことによって学校で報告会があるのであれば、少しずつでも浸透していくと思うので、3年おきと言わずチャンスを与えてこどもたちが上手に育っていくようにしてほしい。

山下市長)

まちに対する愛着も高まると思うが、私は毎年でもいいが、現場は大変だと思う。

中川教育長)

現場としては、どういった視点で見ていったほうがいいのかということからスタートしていて、苦勞を掛けたというのが正直なところである。全校生徒にアンケートをしながら、まとめていく作業が結構あり、その間に現場では中間・期末テストや部活動をやりながらなので、こどもたちに負荷をかけすぎないということも大事かと思う。今回実施したことで、学校現場でどのように能力が活かされていくのか注目したいと思っているし、ホームページを見ると学校で発信されている姿を見るので、そういった意味では貴重な機会ではあるが、実施についてバランスを考える必要がある。

齋藤委員)

大変な困難を乗り越えたわけですね。ただそういう場合はすごい達成感を得られる。

伊藤和子委員)

ただ、それがあまりに特別なものでないほうがいいのではないか。

山下市長)

私は毎年でもいいが、現場が大変である。検討していきたいと思う。こども議会について一言コメントすると、なかなか市政情報だとか行事取組があまり伝わっていない部分があるように感じ、またこどもたちも感じる場所があって、もっと学校・生徒会とか通じての中学生の情報発信に使ってもらってよいという発言もあった。我々も中学生に対しても情報発信したいし、協力してもらえるところは協力してもらって、小中高校生を含めて市民なので、一緒になってまちづくりに取り組んでいきたい。

山田委員)

基本目標3の「こども未来創造センター（仮称）の設置」について、教職員への研修や支援・指導の拠点となる教育センターの設置について検討とあるが、これについて進展や考え方の整理はあるのか。

山下市長)

教職員の研修拠点については、教育委員会と市長部局において現在議論を進めている。必要性についてはお互い認識しながら、場所は例えば現図書館跡地はどうかなど様々な可能性の中で議論をしているが、まだ課題もあって、ここにこういう形で整備していこうというところまでは進んでいないというのが現状である。

高木教育部次長)

実際教職員の研修になると、それなりのキャパだとかいろんなハード的な条件があり、簡単に建物を作るのが難しいというところもあり、ご指摘のありました検討を進める中でも、様々な条件をクリアしないと現実的にはいかないというところで、具体化しないというのが現状である。

山田委員)

いろんな問題点を解決して、少し長期的な中で進めてもらいたい。

齋藤委員)

育英資金のことについて、現状の提供の仕方と今後どういう形に拡充していくのか教えてほしい。

堀田学校教育課長補佐)

これまで30名に対し一人当たり10万円であったが、今年度から一人当たり12万円、30名から45名に拡充という形で進めている。

山下市長)

これは育英基金という過去から市民の皆様から寄付いただいて積み立ててきたものがあり、この中から従来30名の方に支給してきたが、長期的支援が可能ということで、今回見直しをしたところである。これは、高校進学というところで支援を実施しているが、大学進学時の助成については、私共の方でこども夢・チャレンジNo.1実現に向けて、特に昨年度から貧困対策に力を入れており、大学進学時の支度金の一部に充てていただこうということ、これはこども夢・チャレンジ基金の方で出していて、併せて駒来塾を昨年度から北里・篠岡地区で開始し、今年度味岡地区でも開始している。小牧地区には駒来塾が無いのかという意見もあり、来年度から全地区向けに実施したいと思う。人材確保が課題だと思うが、連携していく事業なので教育委員会にも力を貸していただきたいと思う。

齋藤委員)

いろんな意味で難しいと思うが、できる範囲で拡充して行ってほしい。

中川教育長)

駒来塾については、担当部局がこども政策課になっているが、協議をしながら進めている。小牧地区についても要望は聞いているが、それを受け入れたときに支援をしていただける方・人材確保の問題が出てくる。街中であれば場所の問題はクリアできるので、問題は人なので早急に協

議を進めていきたいと思う。

山下市長)

ニーズは高いし、子どもたちのためになっている非常にいい事業であるが、人材の確保が難しいところがあって、本来の状況からすると日数を増やせるといいなと思うが、今後の課題というところかなと思う。この拡充については、来年度に向けて教育委員会と協議していきたい。

駒瀬秘書政策課長)

大学の入学支援の概要を少し説明させていただくと、ひとり親家庭等入学支援金給付事業ということで、ひとり親家庭等の子どもが大学に進学する際の費用の一部を助成している。12万円の100人分ということで、遺児手当受給世帯を対象にしている。

山下市長)

この制度を創設する際に議論したが、全国的には例がないと思う。成績要件をつけている自治体がほとんどだが、小牧市については成績要件を設けずに、世帯の経済状況で対象者すべてに支援できるようにしている。

(2) 主要な取組について

・ICT教育の推進について

資料3に基づき高木教育部次長より説明。

山下市長)

ICT教育の推進といった場合に少し整理しなければならないが、子ども達のICTスキルを伸ばすプログラミング講座などを指すものと子ども達にいかにわかりやすく教えるかというような教育現場でのICTの利活用に分けて考える必要がある。

伊藤和子委員)

P4,5のセキュリティ対策がすべて「未」で、これは一番大事なところだと思うが、どのように考えているか。

野田学校教育課主幹)

現状としては個人情報が出ないようにという対策をしているが、平成29年10月に出されたガイドラインについて検討して、さらに強固なセキュリティを構築していくということで業者と連携して進めている。

小川教育総務課長)

今までも小牧市教育委員会のセキュリティポリシーは作っている。平成29年に国の方で出た指針があるが、クラウドを使ったりとか一部違う部分があるので、そのところを小牧市でどうするか現在考えていて、来年度に作る予定で作業を進めている。現状何も対策していないということではないが、国の指針と違う部分があるので、このように記載されている。

山下市長)

市としてセキュリティ対策は取っているが、国のガイドラインとは違うので、「未」という記載になっているが、これについては対応するということである。

山田委員)

タブレットを増やすということだが、先生方の意見でこんな使い勝手悪いものがあるかという意見が多いが、それを増やしたところでどうなるのかという意見と、そういうことに対応して教員の支援体制を充実させますとあるがそこは上手くいくのか。タブレットを増やすのはいいが、どういう風に教えるかという体系と機器が合わないと思うのではないか。

野田学校教育課主幹)

タブレットについて使いにくいという教員からのアンケート結果ということだが、それを踏まえて今年度9月に導入した小学校のタブレットについては以前と比べ使いやすさという声を聞いて

ている。ただどういうふうに使っていくかというのは今後検討していかなければならないので、今後モデル校に3クラスに1クラス分程度のタブレットを整備し、その使い方について検証をして、それを踏まえたうえで全校導入という形で進めていこうと考えている。その中には教員に対する支援として、ICT支援員を導入し、教員が授業の中でタブレットを有効に活用できるような方策についても検証することを検討している。

山下市長)

ICTについては全国に後れを取ることなく速やかに対応していかなければいけないと思っていて、私は1人1台タブレットを早期に実現したい思いはあるが、何億とお金がかかり、国の財源の手当がない中、市単独で整備をするのは限界があると思っている。まずは、国が定める3クラスに1クラス程度の配備を目指していこうと教育委員会と話をしており、3年4年後ぐらいに市内全域で実施できるようスケジュールを組んでいるところである。

斎藤委員)

機材の充実も必要だが、実際に活用できるのかというのが一番問題である。例えば外部の方にサポート活動の充実というものがあるが、子供たちが「学び合う学び」を実践しているように、先生にも「学び合う学び」を活用して、推進していくためには専門的な知識を持つ先生が各学校にどれくらいいるかとかを整理して、モデル校を設定して推進していくのもいいが、各学校の遅れがないように、先生方がみんな活用するとき聞ける体制や教員の異動時も主体に考えていくとかそういったことも非常に大切なのではないかと。お金をかけないでやれるとしたら、先生方が「学び合う学び」を実践していただければと。やっぱり知識がないので聞くのも恥ずかしいという先生が中にいるかもしれないが、子供たちに平等に指導ができなければいけないので、活用する方法を充実させなければいけないというところで、そこを支援できるものがあればやる必要があるのではないかと。活用しているかどうかも含めて、学校教育課の方で指導なり援助をしていかなければいけないのではないかと。

山下市長)

アンケートにもあるが、活用頻度も学校ごとに差があるように見えるので、モデル校はモデル校でやっていくが、現状の中で実践事例を積み上げていくことが大事だと思う。ぜひ有効に活用してほしい。専門知識云々に関しては、機器の活用についてのサポートはしっかりやっていかなければならないが、それ自体は難しい問題ではないと思っている。ただ授業にいかに効果的に活用するのか、活用するとわかりやすく説明できるのかという課題はあるが、ICT活用においていろんな利点があるのは先進的に取り組んでいる学校の授業を見れば明らかなので、小牧も「学び合う学び」ということは全国でも先進的に取り組んできたという実績もあるが、さらにICTを活用しながら高めていくという部分では、教育委員会の方で他市町の事例を情報収集しながら、授業にどういう風に活用できるのかという部分の積み上げを先生方が共有しながら高めていく必要があり、時間がそれなりにかかるのではないかと。ぜひそこに力を入れてほしい。

中川教育長)

ICTは組織マネジメントだと校長に言っている。タブレットの操作については、若い人たちは抵抗感がない。逆に子どもたちはもっと早いから、分からないことは子どもに聞けばいいし、ベテランの経験豊富な先生がICTに苦手意識を持っているのなら、若い先生に聞けばいい。逆に若い先生は授業づくりに悩みがあるのだったら、ベテランの先生にアイデアをもらえばいい。組織の中で授業づくりのノウハウを持っている方から知恵をもらう、ICTの活用の仕方についてのアイデアをベテランがもらう。そこでどうコラボさせていくかという部分で、ICT支援員が当面必要だと思うが、一方で校長の腕の見せ所として組織マネジメントの一環としてICTを上手く活用していくというのがとても重要である。研修の問題だが、市長からは他市町の先進的な事例をどんどん活用すればよいという話だったが、同じICT環境の中でどのような活用されているかというのは、すでに各小中学校のホームページの右上からアクセスできる小中学校ICTインフォメーションセンターからもヒントがもらえる状況にある。さらにモデル校の方での活用

が発信されるのなら、こういった課題があって今後どういう風に機器を整備していったらいいのか、学び合いの中でいかに有効に活用できるかについて実証できるのではないかと考えている。

山下市長)

授業の実践の中で、ICTを活用して分かりやすい授業だとか「学び合う学び」に活用していただくということ、使い方によって非常に有効だというのはいろいろなところを見てそのように感じており、小牧としていち早く国基準まで導入したいと思うので、財源的なところを含めて検討していきたい。どういう機材をどういう風に導入するかというところを今検討しているところなので、できるだけ使いやすいものを導入していくということで進めていきたい。OSがWindowsのものを活用しているところとipadを活用しているところどちらもあり、一長一短あるのでそこも含めて検討していく。

中川教育長)

新たに小学校に導入された電子黒板機能付きのプロジェクター及びスクリーン、タブレットについて、以前のものとは雲泥の差で、使い勝手は良くなっているし、可能性の幅が広がったと思っている。来年度以降中学校も含めて、整備の仕方等について積極的に進めていけたらと考えている。

モデル校をどこの学校にするのかは今後の議論だが、ICT教育について市長が言われた方向へ進むことができるように、実施をしていきたい。

伊藤敬一委員)

ICTを活用して授業が深まるのは分かるが、先生方がより時間がかからないといことも題目として目指すべきだと思う。必要としていない先生たちにこれを押し付けることによって、仕事量が増えるのはおかしい。これを揃えたからといって、授業の質が深まっているかどうかは、いろんな生徒がいるので全員が深まることはないし、普通の授業の方がよかったという生徒も絶対いるはずである。ICT導入により仕事量が増えるのなら、何をやっているのかわからないし、世の中ICTの流れはあるのだけれども、それは活用の仕方であって余分な仕事にならないようにというところは間違っほしくない。視察で見させていただいてその方がいいのかなと思いつつも本当にいいのかなとも思う。先生方が機械を立ち上げて授業を始めるところでみんなが揃うまでに5分10分かかるとしたらなら、それは必要でない。機械が遅いだとか立ち上がるのが時間がかかるだとかが先生の本音だと思うが、それをちゃんと聞いて進めていって、仕事量のところだとか授業が深まるというところを本質的に考えてほしい。環境を整えるのも大事だが、そこも頭に入れながら進めてほしい。

中川教育長)

ご指摘いただいた点については、現実問題として抱えている課題だと思う。一方で、現場の先生たちはどんな思いでタブレットを使っているのか聞くが、あるベテランの先生が、今までB紙に拡大コピーをして黒板に貼っていたが、デジタル教科書をスクリーンに映し出して、書き込み機能のあるものを活用すると、事前準備の段階が省けるようになったとか、こどもに配るプリントで紙媒体だとその後回収して児童がどういった学びをしたかチェックしなければならないが、データだとどのような形で使われているかその場で見られるし、またグループ学習においてもグループごとの進捗状況が見られるので、そこで評価もできるし事前の準備も楽になった気がすると言っている。そういったメリットもある。環境的な面で課題が出てくるかもしれないが、それは教育委員会としても改善しながら、先生方にとっても効率的で有効なもの、子供たちにとっても効果的なものということは、現場の教員側が考えていかなければならない課題だろうと思う。負担をかけていくというのは一切考えていない。

山下市長)

実践事例を積み上げて共有していけば、最初のスタートは時間がかかるが、楽になっていくこともある。

斎藤委員)

学校訪問でも、上手に活用されている先生の授業を見ると、他の人も活用できるとよいと思う。市長がおっしゃったように、共有できるとよい。

山下市長)

研修とか視察だとかで少しずつ積み上げながら進めていくといい。私が実際見てもいいと思うので、先生方が見れば、いろいろな気づきをされ、活用されるのではないかと思っている。研修ではこのようなことはやっているのか。

中川教育長)

小学校に新たな機器が導入されたということで、活用の仕方についての研修は実施した。導入段階でどのように使われているかについては、年間行事計画の中で検証授業というのが組み立てられているように、活用方法について職員みんなで共有されているので、一朝一夕にできるものでないけど、一步一步進んでいる。教育委員会としても意見を受け止めながら、市長部局に要望させていただきながら進めていきたい。

伊藤和子委員)

教員の格差でICT活用方法が変わってくるのではないかという話も出たが、私はベースとして、補助教材的なものをガイドラインとして示して、その上で各教員のレベルアップで追加したり削ったりはあってよいと思うが、教育委員会で提示できると底上げされると思う。

中川教育長)

以前からICT機器の整備について検討する委員会と活用について検討する委員会がある。それを両方リンクさせることが貴重な財を活かしていくうえで子どもたちにとっても大事なのではないかとこのところスタートしている。その中で、ソフト面でこんなものがあるといいというものも先々検討していく段階が出てくると思う。実際はそういったことも検討されて、デジタル教科書についても導入されたりしているので、そこは十分検討して有効活用できるよう、教育委員会としても努めていきたい。

山下市長)

あらためてアンケート見ると、準備起動や不具合対応などの課題がある。サポート体制をどうするか議論して、ハード面など先生方の領域でない部分のサポート体制について充実させながら進めないといけない。私は、授業のやり方や運用体制について検証してもらいたい。3クラスに1クラス程度だと、運用においてどう支障あるのか。また学校運営のやりくりの部分も検証してもらいたい。機器の準備や不具合だとかに時間を取られるのは別なので、専門的なサポートが必要なのかなと思う。

斎藤委員)

あるものを工夫して使うことも大事である。機器がなくても十分活用できると思う。

伊藤敬一委員)

教育センターの設置について、箕面市の教育センターに行ったが、決して会議室が大きいということはないが、先生たちの資料があったり、気軽に話せる場だったので、ちょっと寄ったら先生がいて話ができて参考になったという場のためにも、これは作ってほしい。箕面市では、理科の教材が共有できるように置いてある。各学校ではなく、そこに借りに行って返しに行つてということで、そこに行くで見られるのでいいなど。お金がかからない方法でやれるといい。広さもこの会議室ほどの大きさであった。

斎藤委員)

各学校で持たなくてもいいということがすごく有効だった。

山下市長)

もう一度研修体制だとか、どのくらいの広さだとか、駐車場は何台いるかなどそのあたりを含めて、教育委員会で検討いただきたい。

最後に計画のネーミングについて「情報化」というのがわかりにくいので、考えてもらえるといいと思う。

4. その他

本日の会議内容について、委員確認後、市のホームページで公開することを報告。